

三中だより

令和2年度 1月号



令和3年1月28日発行
荒川区立第三中学校
(学校通信 No. 13)
校長 小柴 憲一

各種表彰の結果紹介

荒川区、荒川区内の団体、財団法人等の主催によるコンクールなどの選考で表彰の対象となった子どもたちを紹介します。

- 第10回 荒川区 図書館を使った調べる学習コンクール
(今年度は夏休みが短かったこともあり、できる範囲での提出となりました)

学年	氏名	賞	タイトル
2	市川 みづき	奨励賞	日本が抱える問題 ～少子高齢化～
2	細川 玲奈	奨励賞	高齢者と障害者 すべての人に健康と福祉を
2	齊藤 百香	奨励賞	私たちを支えるバリアフリー
2	林 優樹	奨励賞	認知症 ～明るく楽しく過ごすためには～
2	平野 結人	奨励賞	障害者が心地よく生活するには
2	小林 真奈	佳作	少子化と子育て環境
2	濱田 莉々果	佳作	老老介護とは？
2	磯貝 優里	佳作	待機児童ゼロを目指して
2	村上 果歩	佳作	みんなが生きやすい社会に ～障がい者雇用～
2	土屋 明莉	佳作	障害者 ～共に生きるために～
2	森本 小陽	佳作	児童福祉 ～私たちが今できること～
2	渡邊 愛果	佳作	ユニバーサルデザインについて

- “明日の TOKYO”作文コンクール(一般財団法人東京都人材支援事業団主催)

学年	氏名	賞	タイトル
2	齊藤 百香	入選	グローバル社会に向けて
2	森 和音	入選	私の思い描く東京

- 薬物乱用防止ポスター・標語<標語部門>(東京都薬物乱用防止推進荒川地区協議会主催)

学年	氏名	賞	作品
3	中村 由依	地区会長賞 (地区推薦作品)	人生は 一度だけしか 歩めない 未来を壊すな 薬物乱用
3	桑田 真優		薬物が 自分の人生 壊してく 自分で守る 自分の未来

●中学生の「税の標語」(荒川間税会主催)

学年	氏名	賞	作品
3	石黒 菜々美	荒川税務署長賞	税知識 正しく身につけ 広がる未来
3	飯郷 裕翔	都税事務所長賞	納税で 社会を動かす 一員に
3	中村 由依	荒川間税会入選	消費税 日本を支える 大事な土台
3	岩野 美優	荒川間税会入選	知ろう学ぼう納めよう 豊かな生活 支える税金

●第58回中学生作文コンクール(公益財団法人生命保険文化センター主催)

課題「わたしたちの暮らしと生命保険」

学年	氏名	賞
3	清野 小春	都道府県別 2等
3	篠田 来叶	都道府県別 佳作
3	清水 春陽	都道府県別 佳作
3	飯野 愛央	都道府県別 佳作

校内弁論大会 - 聞き取る力と発信する力 -

1月16日(土)に校内弁論大会を開催しました。

例年であれば、体育館に全学年が集まり、各学年の3名の代表の弁論を聞いて評価をしますが、今年度は、全学年を体育館に集めることはできないので、中止にすることも考えました。

しかし、3年生の優秀な弁論を1・2年生に聞かせることにより、1・2年生、特に初めて経験する1年生にとっては、「いいものとはこういうものか」という体験をさせたく、実施することとなりました。

1月16日(土)を迎えるに当たっては、すでに2学期から準備が進められ、まずは自分の弁論を作成するために様々な文献やインターネットで調査し、自分の考えをまとめて原稿を作成しました。その後、学級内での弁論により学級代表を決定し、次に学年弁論大会により学年代表を決定しました。

学年ごとにテーマがあり、1年生は「環境」、2年生は「福祉」、3年生は「国際理解」となっています。各学年の代表者とタイトルは右の表の通りです。当日、欠席のため弁論されなかった作品もあります。

学年	氏名	タイトル
1	元木 夏美	一つのごみで未来を変える
	菊澤 真結	食べ物を捨てない未来へ
	新井 大翔	日本の食卓に安いサンマを！！
2	土屋 明莉	障害者差別をなくす
	松井 心晴	よりよい社会を目指す
	森 和音	時代に合った福祉
3	薄井 茉莉	ジャイアンを見て、平和を知る
	正久 莉愛	今を生きる私たちの使命
	武政 直月	55万件の攻撃とSOS

●発信する(表現)

教科等では、観察をしたり、文献などで調査研究をしたり、インターネットを活用して情報を収

集したりする学習はたくさん行っています。これらの学習で最も大切なことは、自分で考察したうえで自分の意見を持ち、それを文章にまとめて公表したり、言葉で発表したりするなどのアウトプット(表現)をすることなのです。このアウトプット(表現)を目的とするので、子どもたちは文献の内容を理解しようと熟読したり、インターネットでは信頼性・必要性・有益性を考えながら情報の取捨選択をしたりするようになるのです。逆に、アウトプット(表現)がないと、ややもすると本を丸写ししたり、どこかのサイトをコピー&ペーストしたりして提出するだけになってしまいます。そのようなレポート提出が最近とても多いと、知人の大学教授がつぶやいていました。

本校では、普段の授業でも、友達に意見を言ったり、友達の考えや気付きに触れて自分の考えを見直したりするということは日常的に行われており、学校図書館やタブレットを活用した学習においても、最後は、何らかの自分の考察・研究結果をプレゼンしたりしています。

したがって、今回の9名の弁論の優秀な点は多々ありましたが、私が最も感心したことは、聴衆に何を訴えたいのか、分かってもらいたいのかという、主張・論旨が明確で一貫してぶれがないということです。きっと、テーマに関する調査をしている間に、たくさんの問題点があることに気付き、あらゆる情報から自らの考え・主張がわき上がってきたのだと思います。よく分からない弁論というのは、例えば、問題点はたくさん述べているけど、「要するに解決策は何なの?」「だから何を言いたいのか?」と思わせてしまう欠点があります。

1年生の中には、十分に自分の考えをもつまでに至らなかった子どももいると思いますが、今回のいい作品を聞いたことをきっかけに、来年度の改善を期待しています。

●聞き取る(鑑賞)

一方で、何がいいかを聞き取る力を身に付けることも重要です。

ただ、漠然と「いいな」と感じるだけでは、自分の表現に結びつかないのです。

芸術もそうです。小学校時代は、感覚で「きれい」とか「すごい」とか「〇〇みたいで楽しそう」のように鑑賞していてもいいのですが、中学校では、ある作品に対していいと感じた場合、「なぜ自分はそう感じたのか」について自分を客観的に振り返り、例えば「どの部分の」「どのようなところに」「どのように感じたからいいと感じた」のような鑑賞の能力が問われます。そのことにより、自分がいいと感じる作品に、歴史的な共通点があったり、技術的な類似点があったりするなどの傾向があることに気付き、自分の表現力の向上にも繋げていくことができます。

今回の弁論に関しても、単に「いい弁論だ」で終わらせないように、分析的に聞く力を身に付けさせるために以下の4つの観点を示して聞かせました。

独自性	構成・明瞭さ	発表の姿勢	聞く
発表者の独自の視点があるか。	テーマに沿って発表者の考えを述べていたか。	声量・話す速さは適切か。	聞き手として理解しやすかったか。
「独自」の部分が分かりやすかった、あるいは発見できた。	テーマと発表者の考えのつながりが分かりやすかった。	聞き取りやすく、大切なところを発見しやすかった。	全体の構成や内容は自分にとって理解しやすかった。

芸術分野において鑑賞と表現は表裏一体といわれるように、「聞き取る」と「発信すること」「読むことと書くこと」「食べる」と「調理すること」など、生活の様々な分野において、どちらか一方の力だけを育成するだけでは限界があり、両方の側面を伸ばしていくことにより、自力で効率的に資質・能力を養っていけるということがあります。

今回の校内弁論大会がその一例であり、聞き取る力と発信する力両面に刺激を与える学習活動と言えます。

世代間交流事業 ーご高齢の方に年賀状を送るー

昨年末に、本校ホームページを更新してご紹介した生徒会活動です。

荒川区社会福祉協議会では「世代間交流事業」として、「ひとり暮らし高齢者や日中独居の高齢者等に、区内の小中学生が年賀状を作成し送る活動」を、両者の心の交流をすることを目的に実施しています。送付する対象者は75歳以上の「高齢者みまもりネットワーク事業」登録者4,500名としております。

本校では、本事業に生徒会本部が主体となって毎年参加しており、昨年11～12月に生徒会本部役員が各学級をまわって説明した上で、年賀状を作成し社会福祉協議会に送付いたしました。

このたび、本校の子どもたちが作成した年賀状が届いたご高齢の方々から、返信のはがきが社会福祉協議会を通して本校に送付されました。

その一部を紹介します。



●年賀状ありがとう御座居ました。長生きして沢山トシをとってます。コロナウイルスで外出しません。ミシン掛けの内職で着物着付けの伊達 \times 縫ってます。楽しいですよ。〇〇さんも元気で長生きしてね。沢山良い事有りますよ。

牛さんの絵、可愛いね。

〇〇さん江

●〇〇ちゃんお年賀ありがとうございました。一寸色々ありまして今頃になりましてごめんなさいネ。富士山に丑のえがとてもきれいに書けていますネ。

私も二月六日で90才になりますの。でもとても元気でグランドゴルフに散歩に、元気で生きていこうと思っています。希望と夢をもって心優しい女性になってくださいネ。

●年賀状有難う御座いました。コロナに負けないよう頑張ります。84才の私も負けないようにします。貴女コロナに勝ってね。

いずれのはがきも丁寧な字で書かれ、中学生に対して返事を書いていただけるその心優しさにとても感動するとともに、もし自分が80・90歳と生きていくのなら、こんな生き方をしたいなと思ってしまうました。

メディア(TV)の効果と大人の責任

テレビなどに出演する著名なスポーツ選手・解説者、芸能タレント、ニュースキャスターなどの方々が新型コロナウイルス感染症に感染した場合、名前も報道されていますが、その後、一定期間を経て医師の診察や保健師の判断により復職している方がいます。それらの方々に、周囲の方々が以前と同様に接している様子を、テレビ画面を通して見ていると、「とてもいいことを啓発しているなあ」と、私は思います。

東京都人権施策推進指針の中に、人権課題として「ハンセン病患者」があります。ハンセン病は、感染力は弱く外来治療だけで確実に治癒する病気ですが、昭和初期には不治の病であるとか遺伝病と思われ、患者さんは法律により強制隔離され家族も厳しい偏見と差別にさらされました。まさに、無知が引き起こした人権問題です。しかし、これは過去の問題ではなく、今でもハンセン病の回復者がホテルの宿泊を拒否されるという事件が起きており、東京都では人権課題として継続して取り組んでいます。

新型コロナウイルス感染症に感染した方が、医師や保健師などの専門家の見立ての上で社会復帰し活躍を取り戻し、人間関係も通常に行われている様子を発信することは、この人権課題「ハンセン病患者」と同じ轍を踏まないようにする、まさにメディア(TV)でなければできないことであり、大きな責任を果たしていると考えます。

感染者が増えるということは、様々な職場でも復帰される方がいるということであり、それらの方々が、心配することなく以前と同様の生活が送れる風土をつくっていくことも、子どもたちに範を示す大人たちの責任かもしれません。